

新理事長に竹屋氏就任

学長兼務 「大学運営の安定的発展に全力」



令和3年3月から理事長を務めてきた木下統晴氏（76）が6月18日（水）の定時評議員会終了時をもって退任し、同日付で現学長の竹屋元裕氏（72）＝写真＝が理事長に就任しました。任期は2年。今後は学長と兼務することになります。

竹屋氏は、熊本大学大学院生命科学研究部長・医学教育部長・医学部長（併任）を経て平成27年に同大で理事・副学長に就任。同31年からは本学の学長として大学運営にあっています。

理事長に就任した竹屋氏は「これまで6年間の学長経験を活かし、教育の質の向上とともに、大学運営の安定的発展に向けて、全力を尽くしたいと存じます。なにとぞ前理事長同様、よろしくご指導ご支援を賜りますようお願い申し上げます」とコメントしました。

（NL編集部）



勝木事務局次長から花束を受け取る木下氏

「リーディング大学 実現を」

退任の木下氏、最後のエール

18日（水）付で理事長を退任した木下統晴氏に同日夕、事務職員から花束が贈られました。

木下氏は、化血研時代から今日までを振り返りつつ、「本学のヘルスサイエンスは、これからの少子高齢化時代に必要とされる分野です」とあいさつ。集まった事務職員に向け「リーディング大学になると言い続けてきましたが、これが言霊になって実現するように頑張してほしい」とエールを送り、勝木康子事務局次長からねぎらいの気持ちが込められた花束を受け取りました。（NL編集部）

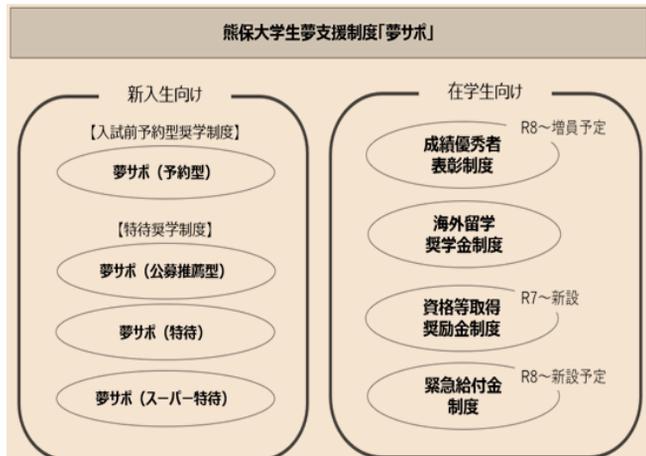
学生支援制度を大幅拡充

令和8年度「夢サポ」創設

本学は、令和8年度から熊本大学生夢支援制度「夢サポ」を創設し、新入生向けの奨学制度や在学生向けの支援制度等を大幅に拡充します。「夢サポ」は、文字通り学生の皆さんの“夢”を“サポート（支援）”したいという思いから命名されました。

新入生向けの奨学制度は、現行制度を大幅に見直します。対象者を各学年46人から最大65人と大幅に増やし、より多くの学生を支援することになります。また、在学生向けの支援制度についても、これまでの制度を拡充するほか、資格等取得奨励金制度の導入や、家計急変が生じた学生への緊急給付金制度の新設等も予定しています。

「夢サポ」が一人でも多くの学生の皆さんのお役に立てることを願っています。（学務課）



写真左は、「知育菓子」作りに挑戦する研修生。同右は、さよならパーティー後、記念撮影をする関係者たち



友情育んだ2週間...タイ・コンケン大研修生が帰国

タイ・コンケン大学からの交換研修生6人が2週間の研修期間を終え16日(月)、無事帰国の途に就きました。

本学の学生、教職員との交流は3日(火)のウェルカムパーティーでスタート。研修生は期間中、熊本大学病院と熊本医療センターの2施設を見学しました。本学では各学科の講義や演習などに参加。昨年度に続き受講した基礎セミナーでは、本学の学生と短編マンガの作成に挑みました。日本語交流の時間には、「知育菓子」作りを通してサポート学生たちと和やかに

交流しました。また、放課後には茶道体験、休日には神社や美術館訪問など、日本文化にも触れました。

13日(金)には、さよならパーティーとプレゼン発表があり、研修生たちが2週間の研修を振り、医療における日本とタイの違いなどを報告。本学学生たちからのプレゼントを受け取り、笑顔を見せていました。

来月2日(水)には、韓国の大邱保健大学から4人の交換研修生を迎える予定です。

(NL編集部)

言語聴覚学専攻3年「小児系発話障害学演習」

正しい構音操作を教えるには？

指導に向け舌や唇の動かし方習得

リハビリテーション学科言語聴覚学専攻3年次の「小児系発話障害学演習」は、正しい構音(発音)ができていない子どもたちに対して、構音操作(正しく発音するための舌や唇の動かし方)を教えるための知識を学びます。

17日(火)、3218実習室で行われた講義では、授業担当の永友真紀講師が、それぞれの音の構音操作のポイントやわかりやすい教え方を説明。その後、学生たちは2人1組となって先生役、子ども役に扮すると、構音操作の指導を実践。正しく音を導くことができた時には拍手をしたり、舌圧子と呼ばれる道具を用いて正しい舌の位置に導いたりして学びを深めていました。

授業後半では、舌を出したまま、唇や歯に力を入れずに10秒間脱力できるかチャレンジ。舌の脱力は側音化構音のサ行やイ列の練習をするときに重要な動きとなるため、学生たち

が言語聴覚士になった時、正しい発音ができている子どもたちに対し、お手本として実践する必要があります。簡単に見える動作ですが、実は難しく、学生たちは鏡を見ながら何度も挑戦していました。(NL編集部)



舌圧子を使って正しい位置に舌を導く練習

多職種連携と地域の絆で「無いもの」補う

基盤研究(C)
(一般)
2025-28年

看護学科
久松美佐子
准教授



日本の精神科医療では脱施設化を進めています。精神障害者の地域移行や地域定着はなかなか進んでいません。特に、社会資源が限られている離島においては、精神障害者の地域定着を図る地域包括ケアシステムについては確立されていません。

そこで、私の研究では、離島へ退院した精神障害者を支えるために、地域の力に着目した地域包括ケアモデルを構築することを目指しています。具体的には、精神障害者が離島で生活を獲得するプロ

セスや関わる要因、精神障害者の家族への支援、離島での支援や多職種連携の状況について調査を行っています。これまでの調査で、離島ならではの絆によって、様々な職種が協働し、無いものを補い合うことで精神障害者を支える強みが見えてきました。

この研究によって、離島だけでなく、精神科病院の所在地との物理的距離のあるへき地など、遠隔地で限られた社会資源の基盤をもつ地域での支援に貢献していきたいと考えています。

閑話休題

高橋 元秀

ボツリヌスの今昔

ボツリヌス菌 (*Clostridium botulinum*) は、公衆衛生学や食品微生物学でよく取り上げられる細菌で、自然界最強の毒素を産生することでも知られている。日本では1950年代から、北海道や東北地方でE型菌に汚染された魚の保存食「いずし」による散発的な食中毒が報告されていた。保健所や地域住民が「作らない、あげない、食べない」と啓発を徹底した結果、近年ではほとんど見られなくなった。

一方、1986年以降は乳児ボツリヌス症の報告が見られるようになり、原因の多くは蜂蜜に混入したA型やB型菌だった。これらは日本には稀な菌型で、多くが輸入蜂蜜に由来していることが分かり、助産師や保健師による啓発活動を通じて乳児への蜂蜜は避けるようになった。しかし、最近は食材が不明な患者が増えてきており、蜂蜜以外に原因食品が多様

化しているようだ。腸内環境（腸内細菌叢）が未熟な離乳前の乳児は、食品に汚染した菌が腸内で増殖し、産生した毒素が全身の筋肉を麻痺させ、重症例では呼吸麻痺で死亡する場合がある。

AおよびB型毒素は筋肉の緊張を緩める作用から医薬品としてさまざまな医療に活用されており、斜視の治療用に開発され、今日では広くジストニアの治療薬に利用されている。美容分野では「ボトックス」として知られ、シワ取りや小顔目的で広まり、身近な多汗症や片頭痛の治療にも応用されている。まさに「毒と薬は紙一重」の象徴的な存在といえる。

The dose makes the poison.

(生物毒素・抗毒素共同研究講座特命教授)

銀杏アラカルト

■高校教員向け進学説明会 県内高校を中心とした本学の進路指導者向け進学説明会が16日（月）、本学3110講義室Mであり、51校、計62人の参加がありました。第1部では、竹屋元裕学長が大学概要、久保高明入学試験委員長が令和8年度入試について説明。第2部では、学部・大学院生の3人がそれぞれテーマを設けてキャンパスライフについて語りました。大学院2年の脇蓮太郎さんは、「研究環境について」と題し、本学を目指した理由や大学院進学のかっかけ、研究内容を報告。助産別科の山本万都香さんは「学部実習～助産別科の学びについて」というテーマのもと、実習での学びや目指す助産師像について、理学療法専攻2年の西村衣純さんは国際交流や学友会での活動を中心に話しました。（NL編集部）



51校、62人の参加があった進路指導者向け進学説明会の会場

週間行事予定（6月23日～6月30日）	
6/27（金）	交通安全講習会
6/27（金）	竹屋元裕新理事長 お披露目式